

宮崎海岸侵食対策検討委員会第7回技術分科会および第10回宮崎海岸侵食対策検討委員会の資料における誤記について

標記について、下記のとおり、誤記がありましたので資料を修正しました。修正後の資料については、第7回技術分科会および第10回宮崎海岸侵食対策検討委員会のページにあります。

宮崎海岸侵食対策検討委員会 第7回技術分科会  
資料7-3 Ⅲ. 検討事項 P13 誤記箇所

4-(2) 突堤の規模の検討  
天端の高さの検討 (検討結果) - 13 -

□ 検討結果(先端部)

- 先端部: 年数回波進行波高が天端を超えない高さがT.P.+3.65~~~3.9~~<sup>4.05</sup>mとなるが、施工性を考慮し、T.P.+4.0mとする。

□ 検討結果(中間の傾斜部分)

- 中間部: 陸側水平部=先端部となることからT.P.+4.0mとする。

(A) 陸側の水平部分 (B) 中間の傾斜部分 (C) 先端部

天端の高さは、陸側の水平部分・中間の傾斜部分・先端部ともにT.P.+4.0mを基本とする。

宮崎海岸侵食対策検討委員会 第7回技術分科会  
資料7-4 Ⅳ. 参考資料 P18 誤記箇所

4-(3) 突堤の規模の検討  
天端の高さの検討 (検討結果) - 18 -

- これより天端高を算定すると、T.P.+4.2m~4.5mとなる。  
先端部天端高=H.W.L.+1/2×年数回波進行波+沈下量  
=T.P.+1.09m+1/2×(4.23m~4.88m)+沈下量  
=T.P.+(3.2m~3.5m)+1.0m  
=T.P.+4.2~4.5m

- もうひとつの算定式より天端高を算出算定すると、T.P.+3.1~3.6mとなる。  
先端部天端高=H.W.L.+1.0~1.5m+沈下量  
=T.P.+1.09m+(1.0m~1.5m)+沈下量  
=T.P.+(2.09m~2.59m)+1.0m  
=T.P.+3.1~3.6m
- これらの平均値を取ると、T.P.+3.65m~T.P.+~~3.9~~<sup>4.05</sup>mとなる。  
先端部天端高平均値=1/2×(T.P.+4.2m~4.5m+T.P.+3.1~3.6m)  
=T.P.+3.65m+~~0.3~~<sup>4.05</sup>m
- 安全側を考慮するとT.P.+~~3.9~~<sup>4.05</sup>mとなるが、これは陸側の水平部分T.P.+4.0mとほぼ同等の高さになることから、施工性を考慮し先端部もT.P.+4.0mとする。
- 以上から、先端部天端高はT.P.+4.0mとする。
- 先端部: 年数回波進行波高が天端を超えない高さからT.P.+4.0mとする。

第10回宮崎海岸侵食対策検討委員会  
資料10-II 「宮崎海岸の侵食対策」 P20

(1)-1) 技術分科会からの報告(委員会からの付託事項)  
天端の高さの追加検討 (先端部・中間傾斜部分の検討結果) - 20 -

□ 検討結果(先端部・中間傾斜部分のまとめ)

観点	検討手法	各観点から必要な天端高	備考
漂砂制御効果	技術的な基準	海拔(T.P.)+2.65~ <del>2.9</del> <sup>3.05</sup> m	
	天端高を低くした場合の越波による通過土砂量を試算	海拔(T.P.)+3.0m以上	天端高が海拔(T.P.)+3mよりも低くなると、漂砂制御機能がより低下する。
施工性	捨石の施工時の安全性	海拔(T.P.)+2.0m以上	捨石天端高を海拔(T.P.)+2mよりも低くすると、施工性が著しく低下する。(施工後に沈下した場合には、被覆材天端高が海拔(T.P.)+2m以上)
経済性	概算工費の比較	(低いほど安い)	天端高が低いほど安くなる。
景観	フォトモンタージュ	(一般に低いほど良い)	天端高が低いほど見通しは良い。
海上からの視認性	出漁限界波高時の視認性	海拔(T.P.)+2.6m以上	天端高が海拔(T.P.)+2.6mよりも低くなると、出漁限界波高時の視認性が確保されない。

- 先端部・中間傾斜部分: 天端の高さは、漂砂制御効果、その他の観点を考慮して、海拔(T.P.)+3.0mを基本とする。